

2019（平成31）年度

1日【*】

国語

注意

- 1 開始の合図があるまでは、開かないこと。試験時間は、六十分である。
- 2 問題は声を出して読まないこと。
- 3 問題用紙は二十三ページ、、の二題から成っている。
- 4 問題用紙および解答用紙に、落丁、乱丁、汚損あるいは印刷不鮮明の箇所などがある場合は、手をあげて監督者に申し出ること。ただし、**内容に関する質問は受けつけない。**
- 5 解答は必ず**鉛筆**を使用し、**解答用紙に記入**すること。
- 6 解答はすべてマーク式の解答欄①②…を丁寧に塗って解答すること。
- 7 訂正箇所は、消しゴムで**完全に消す**こと。
- 8 解答に関係のない符号（?レなど）や文字は記入しないこと。
- 9 解答用紙を折ったり、汚したりしないこと。

一 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

日本語では、「美しい」という形容が、目で見るものや耳で聞くもののような知覚対象物のほか、愛情や友情、あるいは献身のような行為にもかぶせられる場合がある。英語にも「ビューティフル・フレンドシップ」といった表現があるようだから、文化をこえてヒトに共通した感覚らしい。直接の知覚によらない「美」ということで、ここでは観念上の美とよんでおきたい。

観念上の美として謳われる行為にはさまざまなものがあるが、大きく共通するのは、いずれもが、自分を捨てて他者を助ける、つまり利他的な行動ということだ。異性や同性の個体どうしの一方が他方に対し、または相互に、みずからの利を捨てて相手の利を望む「純愛」や「友情」。そこに上下関係があれば「チュウセイ」。自己の利よりも共同体の共通利益を求める「献身」。さらに進んで、共同体の共通利益のために自分の生命までを犠牲にする戦死や殉職。程度の差はあるだろうが、文化の違いを超えて、「利他行動」と

I このような行為を見聞きしたときや自分がおこなったときに、多数の人びとは感動や心地よさを覚え、それをしばしば「美しい」と表現するのだ。ヒトの心はそのようにできているとみえる。《 a 》

あ では、利他行動は、なぜ「美しい」と形容されるような心の働きをよんでしまうのだろうか。自己中心な個体よりも、利他的なふるまいを優先させる個体が生存上有利となる社会環境のなかで、ヒトはその心を進化させてきた。オランダ生まれの心理学者で動物学者のフランス・ドウ・ヴァールは、この進化がチンパンジーとの共通祖先と分かれる前にすでに生じていたと説く。かたや、分かれてヒトとなったのち、社会の複雑化のなかで利他的な心が進化したことを強調するのは米国の人類学者で動物行動学者のクリストファー・ボームである。

ボームによると、自己中心的性質の個体は、サギ師のようにこっそりとにせよ、暴君のように堂々とにせよ、他者の利他行動を食い物にしてのさばれば、共同体のほかのメンバーから排斥され、もつとも極端な場合は死刑をもって生存や生殖の機会をうばわれる。自己中心的な行動を発現させる遺伝子は、そのようにして次の世代に残りにくくなるというわけだ。だが、高い学習能力や社会的知能を進化させてきたヒトは、たとえ自己中心的性質の強い個体であっても、それを隠し、意図して利他

的にふるまってみせることができるので、そうした遺伝子がなくなってしまうことはない。

い つまり、生物学的淘汰^{とくた}と社会的学習の両方によって、ヒトの利他行動と、それによる人間関係で織りなされた社会が進化してきたといえる。大型獣の狩りなど、多人数が無私に協力し合うほうが成功度の高い社会的環境が、ヒト独特のこのような社会を作り上げたとボームは説く。利他行動とそれをよしとするモラルに支えられて、ケツ^ツエンを大きく超えて **II**

に結びつく、ヒト独特の複雑で大きな共同体が実現された。観念上の美は、このような共同体に属する膨大な数の人びとどうしを、もっぱらその心の働きを用いて緊密に結びつける。現代でもっとも大規模な共同体である国家でいえば、さしずめ、

x がそれに当たるといえるだろう。《 b 》

観念上の美は、いまみたように、社会の形成と強化にきわめて重要な役割を負っているけれども、物質を対象とする考古学は、観念としての美について、信頼できる分析のすべをもたない。したがって本書では、それが明らかに物質に表現されているとわかるときにかぎって、観念上の美に言及することにする。ただし、本書でおもな分析対象とする知覚の美もまた、観念上の美に劣らず、それと並び、ときにはそれと絡み合いながら、社会関係上で積極的に利用され、ヒト固有の複雑で大規模な共同体を作り上げ、強化する役割を果たしてきたことはまちがいない。《 c 》

う これまで、人類社会の歴史は、もっぱらその経済的・機能的な側面の発展を主たる道筋として描き出されてきた。一九世紀にマルクスやエンゲルスが確立した唯物史観では、歴史を根底で動かすのは生産力であり、人びとはそれに対応する生産関係を結んでいるが、生産力がより高次元の発展段階を迎えると既存の生産関係と矛盾してそれを突き崩すこととなり、新しい生産関係へ移行すると説かれる。生産力や生産関係という経済の変化に、歴史の動きは根ざすと考えられたのだ。社会関係や政治構造、思想や文化などは生産関係に規定されて立ちあらわれるものとされ、本書であつかう知覚や感情などが、人類の歴史を動かす要素として考察されることはない。

これに対し、第二次世界大戦後の二〇世紀後半には、人類学の文化進化論が、考古学による人類史叙述の主たる枠組みとなつた。そこでは、人間が環境の中にさまざまな諸機能からなる社会を生み出し、それにより環境に変化が生じ、その変化がま

た逆に社会のある機能を変化させ、さらにそれが社会の別の機能にも影響して社会全体が変化し、さらにその変化がふたたび環境に働きかけて……という連続が、歴史の過程としてとらえられてきた。社会を機能体とみなす理解であり、思想や宗教を諸機能の一つとして生産や生業と同等に置く点は、唯物史観とは異なる。ただし元来が、史的唯物論と同様、集落や社会というような「集団」を対象とした歴史のとらえ方であり、個人レベルの事象である知覚や感情に立ち入った考察が発展することは、ほとんどなかった。

これら**B**古典的な人類史の理論をみると、知覚や感情の産物である美は、経済を軸とする社会形成の**Ⅲ**のようにつかわれたり、思想や宗教が機能するための道具のようにみなされたりして、その主体的な役割をまともに問われてきたようすはあまりない。だが、クジャクの飾り羽が彼らの社会の再生産に決定的に重要な役割を演じているのと同じように、美のあり方が人類社会の再生産を方向づけたとみなす余地は、本当にはないのだろうか。

え 美の知覚や感情をあらわすためにつけられた器物の文様や意匠、美そのものを純粹に体现した壁画や人形が、数万年前にさかのぼるホモ・サピエンスの社会にあらわれていた。その後、原始土器、ストーンサークル、ピラミッド、神殿、青銅や金の装飾、王侯が眠る巨大な墳墓、きらびやかな玉器や鏡、天を突く仏塔や聖堂、贅をこらした城館、カラフルな織物、大理石の彫刻、さまざまな題材の絵画など、美のための器物や造作は、世界の各地で連綿と生み出され、今でも途切れる気配はない。人類の過去と現在と未来は、美に埋めつくされているといってもいい。《 d 》

これらの美は、本章で述べてきたように、見る人の心に作用し、その感情や思考や行動を左右する力をもっている。感情や思考や行動に沿って人びとが織りなしている対人関係の集合が社会であるならば、美が社会そのものの形成や維持や強化を左右していることは明らかだろう。少なくとも、先に社会ができ、つぎにその社会の形に合うように美が創出されるという順番ではない。もっと主体的に、美は社会を織りなす役割をはたしてきたにちがいない。《 e 》

たとえば、ナイル河畔にそびえ立つピラミッドがかもし出す美は、当時の人びとの心を動かして感情や思考をはぐくみ、それに根ざした意志決定や行動を導いた。そして、そのことを通じて、王が君臨する強固な階層社会を実際に作り、保つように

人びとを動かした。美のないところにいきなり階層社会が立ち上がり、それに沿うようにピラミッドが考え出されたわけではない。日本列島の巨大前方後円墳も同じだっただろう。

お ピラミッドがあらわれる前にはマスタバ（台状墓）という美があった。マスタバもまた当時の人びとの感情や思考を左右し、よりパワフルな美の形、すなわちピラミッドを導き出した。結果として、ピラミッドに葬られた王はマスタバの主よりも傑出した存在であるという認識が、美の感情と思考を通じて演出され、既存の階層社会をますます強化することにつながった。そこでは、食うや食わずの人びとが、飽食のきわみをつくす人びとの存在を許容するどころか、敬いあがめるような社会が達成された。美には人の心を麻痺まひさせるといふ側面がある。

社会が一方的に美を作るのではない。社会と美とは、まるで身体と心のように相補的・双方向的に機能し合い、人類の歴史を前に動かしてきたのだ。

（松木武彦『美の考古学―古代人は何に魅せられてきたか』による。出題の都合上、一部中略した箇所がある。）

注 1 マルクス―ドイツの経済学者・哲学者（一八一八―一八八三年）。

2 エンゲルス―ドイツの思想家（一八二〇―一八九五年）。

問一 傍線部(ア) (ウ) のカタカナを漢字に改めた場合、それと同じ漢字を含む選択肢を次の各群の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を答えなさい。

(ア) チュウセイ

- 1 喧嘩けんかをチュウサイする
- 2 土砂がチュウセキする
- 3 チュウギを尽くす
- 4 チュウシヨウ的な考え
- 5 セツチュウ案を出す

(イ) サギ

- 1 ギコウをこらした絵
- 2 ジギを得た発言
- 3 キヨギの報告をする
- 4 ギマンに満ちた言動
- 5 世相をギガ化する

(ウ) ケツエン

- 1 エンタイ料金を支払う
- 2 エンテンカで運動する
- 3 味方にエンゲンを送る
- 4 エンギの良い話を聞く
- 5 エンポウへ旅立つ

問二 空欄

I

)

III

に入る言葉として最も適当なものを次の各群の選択肢の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を答えなさい。

I

- 1 蔑視される
- 2 区別される
- 3 演繹えんえきされる
- 4 総称される
- 5 断片化される

II

- 1 一義的
- 2 可及的
- 3 互惠的
- 4 帰納的
- 5 象徴的

III

- 1 占有物
- 2 遺失物
- 3 副産物
- 4 配付物
- 5 共有物

問三 本文中の《 a 》《 e 》のうち、次の一文を入れる箇所として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

これが、観念上の美だ。

- 1 《 a 》
2 《 b 》
3 《 c 》
4 《 d 》
5 《 e 》

問四 空欄 X に入る語句として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 利己的な「純愛」
2 政治的な「友情」
3 「美しい」愛国心
4 「利他行動」の遺伝子
5 社会的な「集団」

問五 傍線部 A 観念上の美とあるが、筆者は社会との関わりにおいて「観念上の美」の働きをどのように見ているか。その説明として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 ヒトは、自分を捨てて他者を助ける行動を肯定的に捉える倫理に基づき複雑な共同体からなる社会を作ったが、このような観念上の美は社会の形成と強化にとって大事なものである
- 2 ヒトは、一般的に自分自身の「利他行動」を「美しい」と表現してきたが、このような観念上の美は、言語や文化が違くと人が社会を構成するための素地を作れない
- 3 「利他行動」を「美しい」と形容する心が生じた時期と社会の形成時期とは、観念上の美の観点からすると、狩りを開始するよりも前のことであると考えられている
- 4 ヒトは、遺伝子のレベルでは「利他行動」を評価しない生き物であるが、観念上の美を共有することで、「利他行動」を評価する社会を作り上げてきた
- 5 ヒトは、目や耳などによる直接の知覚にもとづく「美」を「美しい」と評価してきたが、このような観念上の美を評価する生物的進化と社会的学習が複雑な共同体の形成を促した

問六 傍線部B 古典的な人類史の理論 についての説明に合致しないものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 人類社会の歴史を、社会の経済的・機能的な側面の発展に注目しながら叙述することが多かった
- 2 唯物史観では、人類の歴史を動かすのは社会や政治を規定している生産力や生産関係であるとした
- 3 文化進化論では、社会を機能体とみなし、社会の変化と環境への作用の連続が社会を動かすと考えた
- 4 文化進化論は、唯物史観と異なり、人類史における思想や宗教とならんで美も重要な社会的機能と見る
- 5 人類社会の歴史を動かす要素として、知覚や感情を経済や集団ほどには重要なものとはみなさない

問七 傍線部C 美のあり方が人類社会の再生産を方向づけたとみなす余地は、本当にはないのだろうかとあるが、これについての筆者の考えの説明として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 青銅や金の装飾は、これを見る人の心に大きく作用してきたことは明らかだが、経済の再生産には直接大きな影響を与えなかった
- 2 同じ階層社会であっても、どのような美が生まれるかは社会を構成する人々の感情や思考に左右されるので、まずは社会の存在が美のあり方を規定するといふべきである
- 3 巨大なピラミッドの存在がその主である王の君臨する階層社会を強化したように、美は社会の再生産を方向づけるものである
- 4 巨大ピラミッドの美をあがめる心を利用して、エジプト社会全体の経済的な生産性を向上させてきたように、歴史的に美は社会の再生産を方向づけてきたといふてよい
- 5 美は社会を方向づけ、社会もまた美を規定するが、社会が人間の身体であり美が心であるなら、社会という入れ物は美が存立するための必要条件といえる

問八 本文において扱う「美」の内容が大きく変化する段落の冒頭を示す記号として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 あ
- 2 い
- 3 う
- 4 え
- 5 お

問九 本文の内容と合致するものを、次の選択肢の中から二つを選び、その番号を答えなさい。

- 1 利他行動の見聞や体験に観念上の美を感じるか否かは、言語や文化の違いに左右される
- 2 自己中心的な個体が遺伝子を残す可能性が高い弱肉強食の社会では、利他行動をよしとする心は生まれなかった
- 3 直接の知覚によらない美である愛情や献身がヒト独特の共同体の形成に寄与した
- 4 経済や社会の機能を中心に人類史を考えてきたので、美による社会形成の重要性が明らかになった
- 5 目に見え触れることのできる物質を対象にする以上、考古学では直接の知覚によらない観念上の美は考察できない
- 6 知覚や感情の産物である美は、社会と補い合いながら主体的に人類の歴史を形作ってきた

二

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

倫理や道徳は精神的規範だから、道徳や倫理の教科書に書いてあるだけでは意味がない。それは私たちの内部つまり心のプログラムに書き込まれて、はじめて精神的規範としての意味をもつことになるわけである。そのとき、それらの論理や規範は、「私」の内部で「理性」とか「良心」などと呼ばれる種類の心のプログラムを形成することになる。その理性とか良心など言われるものが形成される過程を考えてみよう。

心のプログラムは、まず脳の形成時に、DNAによって無条件反射のためのプログラムが書き込まれる。無条件反射のプログラムのもつ論理は、自分の中にある遺伝情報をできるだけ多く残そうとする遺伝情報の論理 a したがって、その論理体系は開いた論理体系であって、その中には価値尺度は含まれていない。この無条件反射のプログラムの中には、個体としての人間を守るためのボウエイ^ア反射のようなプログラムもある。個体を守るのは遺伝情報を保存し生殖によってより多くの遺伝情報を残すためであって、そのことが「善いこと」だからではないのである。そこにある論理は

x。

生命体として誕生した幼児の心のプログラムや意識のプログラムは、模倣反射や探求反射によっていろいろな学習をしながら次第に複雑で高度なものになっていく。簡単な言語の使用ができるようになると、次第に「私」と「他者」の分化がはじまり、主体としての「私」が形成され始める。「私」の形成は同時に心のプログラムの中に「生命体としての「私」の論理」つまり「個の論理」を持ち込むことでもあり、視点を変えれば「主人」である遺伝情報に対しての「生命体≡生存機械」の自由を求めているのはじまりでもある。

その、生命体から人間へと成長した子どもたちは、幼稚園や学校や地域社会などのヒューマン・ネットワークとの関わりによって、心のプログラムの中に、幼稚園や学校の決まり（集団の中での行動のルールなど）、地域の慣習や風習などといった規範を取り入れ始める。その子どもたちが成人し、やがて企業や社会と直接関わるようになると、心のプログラムは急速に

「社会の論理」に支配されるようになっていく。現在の日本のような資本主義市場社会では、その社会の論理の根底にあるのは「市場社会の論理（資本の論理）」にほかならない。また、宗教を信じるようになった人々にはその宗教の論理が、政治結社に属するようになった人々にはその政治結社の論理が、心のプログラムの中に組み込まれていくことになる。

このようにして、心のプログラムの中に書き込まれたさまざまな論理や規範、倫理や道徳は、「私」の中で理性とか良心などと呼ばれる情報処理のためのプログラムとして形成されることになるわけである。理性とか良心などといわれるものは、「理性や良心にしたがって行動する」などとされるように、一種の行動のシ^インであり、その中に何らかの価値尺度を含んだ閉じた論理体系である。理性や良心のプログラムは、プログラムの性格から言えば、食欲や性欲のような無条件反射のプログラム、物欲や名誉欲のような生後形成される心のプログラムを制御する機能をもったプログラムだから、心のプログラムというより、心のプログラムを統括している意識のプログラムの I ものと言った方がいいかも知れない。

いつだったかテレビのドラマを見ていたら、ラストシーンで主人公の青年が「これから（本当の自分）を探す旅に出る」という場面があった。この「本当の自分」というのは最近よく使われる言葉なので、ついでにその「本当の自分」というものの微視的な見方を考えてみよう。

成長の過程で簡単な言語の使用ができるようになると、主体としての（自己）が形成され始める。この心のプログラムは、学習や経験によって自己組織されるプログラムだから、そのプログラムの性格を決めるのは、主として学習と経験の場である周囲のヒューマン・ネットワークとの関わりである。そしてその人間をとりまくヒューマン・ネットワークは、人によってさまざまだから、心のプログラムには人それぞれに異なった情報処理の^Ⅳパターン、つまりその人特有の閉じた論理である人生観なり価値観なりができあがる。

II

新しいヒューマン・ネットワークとの関わりを余儀なくされる。

そして学校や家庭や職場などの集団や組織にも、それぞれの集団や組織の閉じた論理がある。新しい集団や組織の中で生きることになった個人は、その集団や組織との関わりを通じて集団や組織の論理が心のプログラムに書き込まれていく。そのとき、

心のプログラムの中にすでにその人なりのものの考え方や価値観ができあがっていると、新しく書き込まれようとする論理や規範との間に、食い違いが生ずることも稀^{まれ}ではない。自分の考え方や価値観と、家風や校風や社風あるいはその地域の慣習との間に食い違いやずれが起きた場合、その集団や組織の中では生きにくいことになる。その集団の中で、あくまで自分の考え方や価値観^ウをツラヌこうとすれば、時には、その集団や組織からはじき出されることもある。また、Ⅲ 「村八分」の状態に置かれることもある。したがって、多くの場合、自分の考えや価値観とはちがった行動をとらざるを得ず、その葛藤は自分の内部の葛藤に転化されることになる。これはいまあげたような特定の集団や組織との間だけのことではない。周囲の人間たちやマスコミを通してかかわる「世間」とか「社会」とか呼ばれる不特定の集団の方がむしろ問題かも知れない。世間の常識や社会の風習に従っていけば無難に生きられる。しかし、それがその人の人生観や価値観と大きく、b 微妙にずれているときは、その社会の中で自分を「イホウジン」と感ずるか、あるいは状況に妥協して生きている自分を、何となく「本当の自分」ではないと感ずることになるわけである。

いま述べたさまざまなヒューマン・ネットワークの論理や規範の論理体系としての性格を考えてみよう。論理の性格から言え、いま述べたように、家風、校風、社風、地域の慣習などは、それぞれに閉じた論理体系である。家風、校風、社風、地域の慣習などは、それぞれの家庭や、学校や、企業や、地域によって異なるし、それらには共通する部分もあるが、相容^{あひい}れない部分もあるからこそ「……風」と言われるわけである。^オヨメと姑の問題もそれぞれの育った家の家風（特に「家」というものに対する考え方）の違いに起因することが多いであろう。国家や社会における倫理や道徳も、国が変わり時代が変われば変わるものであることは、キリスト教圏の国々の倫理とイスラム圏の国々の倫理、戦時中の日本の修身の教科書と現在の道徳の教科書をくらべてみれば明らかであろう。つまり、国家の倫理や社会の道徳などもそういう意味では閉じた論理体系なのは明らかである。人類つまり種としての人間に「人間として守るべき倫理」とでもいうものがあるとすれば、それは「人間という種の中では」開いた論理体系になる。c、それはあくまで人間という種の論理だから、他の生物種を含む生態系からみれば閉じた論理体系であることは言うまでもない。そして、生態系のもつ論理は、突然変異や生殖による遺伝子の組換え

や自然選択という無目的な物理・化学的な法則の支配する論理だから、開いた論理体系であることは第一章で述べたとおりである。

論理体系の包含関係から言えば、より上位の集団の規範が下位の集団を拘束する。法治国家の場合、国家の法律はその国家の中のすべての地域社会や企業や家庭や個人を拘束する。もしある団体や個人が自分の属する国家や社会に反逆する自由をもつことがあるとすれば、それは国家の法律や社会の道徳が、より上位の「人類の規範」つまり「人間としての倫理」に反するときである。そのときその団体や個人は「人間の名のもとに」その国家や社会への反逆が許されるのである。植民地の解放闘争や帝国主義への革命戦争が正当化されるのは、帝国主義の植民地の人民や労働者階級への圧制や搾取が、人間としての倫理に反すると考えられるからであろう。そういう意味では、その「人類の規範」とでもいうべきものももし存在すれば、それはすべての国家や社会を含むあらゆる人間集団や組織の規範の根底となるべき論理あるいは規範と^cいっていいであろう。そしてそれは、私たちすべての人間にとつても、守らなければならない論理あるいは規範であることになる。

(小西久也『私たちはどこへ行くのか―生命と人間と社会の論理闘争』による。出題の都合上、一部中略した箇所がある。)

問一 傍線部(ア)～(オ)のカタカナを漢字に改めた場合、それと同じ漢字を含む選択肢を次の各群の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を答えなさい。

(ア) ボウエイ

- 1 宇宙ユウエイを試みる
- 2 世相をハンエイした事件
- 3 支店長にエイテンする
- 4 自然の美にエイタンする
- 5 人工エイセイを打ち上げる

(イ) シシン

- 1 試合にシンショウする
- 2 考え方がシントウする
- 3 シンヨウ樹からなる森
- 4 配置転換をダシンする
- 5 家を新たにフシンする

(ウ) ツラヌこう

- 1 カンビな香りのする花
- 2 基本練習がカンジンだ
- 3 相手の意図をカンパする
- 4 初志をカンテツする
- 5 悪にカンゼンと立ち向かう

(エ) イホウジン

- 1 外国文学のホウヤク
- 2 ドウホウが相争う戦争
- 3 新年度のホウフを語る
- 4 記念にホウビを与える
- 5 テンイムホウな振る舞い

(オ) ヨメ

- 1 妻と死別しカフとなる
- 2 機械のカドウ率を高める
- 3 スンカを惜しんで働く
- 4 他人に責任をテンカする
- 5 カレイな舞いを披露する

問一 空欄

a

く

c

に入る語として最も適当なものを次の選択肢の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を答えなさい。なお、一つの語は一回しか用いてはならない。

- | | | | | | | | |
|---|-------|---|------|---|----|---|-------|
| 1 | すべからく | 2 | しかし | 3 | 案外 | 4 | あるいは |
| 5 | すなわち | 6 | いかにも | 7 | さて | 8 | さしあたり |

問三 空欄

I

)

III

に入る語句として最も適当なものを次の各群の選択肢の中からそれぞれ一つずつ選び、

その番号を答えなさい。

I

- 1 一口乗る
- 2 一環をなす
- 3 一隅を照らす
- 4 一考を要する
- 5 一芸に秀でる

II

- 1 頭ごなしに
- 2 否応なしに
- 3 大過なく
- 4 節操もなく
- 5 心置きなく

III

- 1 出されるけれども
- 2 出されようものなら
- 3 出されないどころか
- 4 出されないまでも
- 5 出されるのはおろか

問四 傍線部 A 開いた論理体系 とあるが、この「開いた」と同じ意味で「開く」という語が使われている文はどれか。最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 父は経営する飲食店の二号店を駅前を開いた
- 2 教授は理論物理学発展の道を開いた人物である
- 3 大学の図書館を社会に開かれたものとする
- 4 事態が深刻なあまり、口を開く者はいなかった
- 5 友人の一言が美術についての私の目を開かせた

問五 空欄 X に入る表現として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 究極的には、人間という生命体の意識にもとづくものである
- 2 基本的には、生命体つまり個としての人間の論理ではない
- 3 厳密に言えば、生命体としての人間にしか通用しない論理である
- 4 極端な言い方をすれば、人間という生命体を否定するものである
- 5 裏返して言えば、人間という生命体に不利な論理である

問六 二重傍線部 i、iv を、本文中に示された筆者の考えに従って二つのグループに分類するとどのようなようになるか。最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- i 幼稚園や学校の決まり
- ii 理性や良心のプログラム
- iii 無条件反射のプログラム
- iv 情報処理のパターン

- 1 (i) / (ii・iii・iv)
- 2 (i・ii) / (iii・iv)
- 3 (i・iii) / (ii・iv)
- 4 (i・iv) / (ii・iii)
- 5 (i・ii・iv) / (iii)

問七 傍線部 B ヒューマン・ネットワークの論理や規範の論理体系としての性格とあるが、これに関して述べた次の説明の

うち、本文の内容に合致するものはどれか。最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 学習や経験と、それが行われる場でのヒューマン・ネットワークとの関わりは、心のプログラムとは関係ない
- 2 自らの既存の価値観と外部からくる新しい価値観との間に齟齬そごが生じてても、人は無難に生きられる
- 3 何らかの組織や集団に属することなく生きているから、人は「本当の自分」を探したくなる
- 4 心のプログラムに影響を与える種々のヒューマン・ネットワークは、それぞれに独自の論理を備えている
- 5 遺伝子を組換えることは、本来は「開いた」論理を人間の「閉じた」論理体系に引き込む点に問題がある

問八 傍線部C 私たちすべての人間にとつても、守らなければならない論理あるいは規範であるとあるが、それはなぜか。

その理由の説明として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 「人類の規範」というべきものが存在するならば、それが時代によって変わるにしても、「人間という種の中では」開いた論理体系である以上、その時代の唯一の規範であると言えるから
- 2 「人類の規範」というべきものが存在するならば、それは「人間という種の中では」開いた論理体系ではあるが、他の生物種の論理体系をも含めた、より開かれた規範を目指すべきであるから
- 3 「人類の規範」というべきものが存在するならば、それは「人間としての倫理」が達成された状態であり、価値観の違いから生じる生きづらさを消すために従うべきであるから
- 4 「人類の規範」というべきものが存在するならば、それはすべての集団や組織の論理、社会の風潮や常識の土台になり、それらに属する私たちの心のプログラムを組織するものであるから
- 5 「人類の規範」というべきものが存在するならば、すべての人間を含む下位の集団がもっていた反逆する自由は不当なものとなり、圧政や搾取をも受忍すべき状態に置かれるから

問九 本文の内容に合致するものを、次の選択肢の中から二つを選び、その番号を答えなさい。

- 1 無条件反射のプログラムのもつ論理は、「個」としての人間というよりもむしろ「種」としての人間の論理である
- 2 「私」のはじまりが遺伝情報に対する反逆であった以上、人が国家や社会に反逆する自由を持つのは当然である
- 3 理性や良心は「心のプログラム」の一つで、ヒューマン・ネットワークを作り上げるために誰にでも開かれている
- 4 集団と自己の価値観の相克を解消する方法として、筆者は〈本当の自分〉を探す旅に意義を認めていない
- 5 特定の社会集団だけに閉じた論理体系は、その社会集団の変容や時代の経過に伴って変質していくものである
- 6 ある社会集団の倫理と国家の定めた法律が矛盾したときには、常に解放闘争や革命戦争は正当化される

国語解答用紙 1日【*】

一

問一
(ア)
①
② ●
③
④
⑤
(イ)
①
②
③
④ ●
⑤
(ウ)
①
②
③
④ ●
⑤

問二
I
①
②
③
④ ●
⑤
II
①
②
③ ●
④
⑤
III
①
②
③ ●
④
⑤

問三
●
②
③
④
⑤
問四
①
②
③ ●
④
⑤
問五
●
②
③
④
⑤

問六
①
②
③
④ ●
⑤
問七
①
②
③ ●
④
⑤
問八
①
②
③ ●
④
⑤

問九
①
②
③
④ ●
⑤
●

二

問一
(ア)
①
②
③
④
⑤ ●
(イ)
①
②
③ ●
④
⑤
(ウ)
①
②
③
④ ●
⑤
(エ)
●
②
③
④
⑤
(オ)
①
②
③
④ ●
⑤

問二
(a)
①
②
③
④
⑤ ●
⑥
⑦
⑧
(b)
①
②
③
④ ●
⑤
⑥
⑦
⑧
(c)
①
② ●
③
④
⑤
⑥
⑦
⑧

問三
I
①
② ●
③
④
⑤
II
①
② ●
③
④
⑤
III
①
②
③
④ ●
⑤
問四
①
②
③ ●
④
⑤

問五
①
② ●
③
④
⑤
問六
①
②
③
④
⑤ ●
問七
①
②
③
④ ●
⑤
問八
①
②
③
④ ●
⑤

問九
●
②
③
④
⑤ ●
⑥

50点

50点